『菅家文草』断章

――漢詩の本文と解釈をめぐる覚書――

本間洋一

一

『菅家文草』は大系本（川口久雄校注、昭和四十四年第3刷）を身近かに置き、時々披いている。それは研究の為というよりは楽しみの為と言った方が良いだろうか。心持ちとしては「好読レ書不レ求二甚解一、毎レ有レ会レ意、便欣然忘レ食」（陶淵明「五柳先生伝」）などという境地が理想なのだが、ともあれ、道真詩の表現の一端にでも共感したいという思いがあり、これ迄も拙い文[1]を綴ってきたが、此度も自分の読み方を提示して、諸賢の御批正を受けたく思う。

大系本の本文には問題があるとする人も少なくない――これ迄の拙文でも言及していることだが――と思うので、先ずは単純なものから採挙げ付言することから始めてみたい。大系本の本文を上部に白文で掲げ（ゴチック体の字が問題箇処）、訓読文で稿者の案（ゴチック体）を提示するという、これ迄通りの形をとることとしたい。

書斎対雨閑無事　書斎にて雨に対ひ（むか）　閑にして事無し
兵部侍郎興**猶**催　兵部侍郎　興**独**り催す

（68「書斎雨日独対二梅花一」）

七言律詩の尾聯。「猶」の位置は平仄上仄声字が望まれるところであり、「猶」は既に第五句で用いられている。その為か訓読した「なほ」から「尚」（仄声。『日本詩紀』）を当てるものもあるが、稿者は「独」とすべきところと考える（題名とも対応する）。

若使風霜怒　若し風霜をして怒あらしめば
当留早老顔　当に早老の顔を留むべし　（153「残菊」）

五言律詩の尾聯。もし、風霜を「怒」らせたりしたら、その為に人はひどく年老いることになるのであって、老いを少しでも留める為には、風霜の寛恕（心広く思いやりのあること）を願うべきであるはず。意味から考えて「恕」（内閣文庫林家本・来歴志本・元禄版本等）とあるべきところである。

樵夫披得道　樵夫は披きて道を得
隠士遂知家　隠士は逐ひて家を知る　（163「片雲」）

五言律詩の頷聯。詩句は題意をふまえて、樵夫は「片雲」を披いて己の行く道を見出し、隠者は「片雲」を「逐」（来歴志本・『詩紀』等）って己の家を知る、という内容であるべきはずである。

負薪家産苦　薪を負ひ　家産苦し
山路幾多難　山路に　幾多か艱める　（168「樵夫」）

五言律詩の首聯。押韻は刪韻なので、「難」（寒韻）ではなく、当然「艱」（来歴志本・元禄版本）でなければならない。

飛疑秋雪落　飛びては疑ふ　秋の雪の落つるかと
集談浪花匂　集ひては誤つ　浪の花の匂ふかと　（171「水鷗」）

この五言律詩の頸聯の一処「談」（平声）のみ平仄式に合わない。仄声字が求められるところで、比喩の表現形式「疑――、誤――」を想起して、「誤」（仄声）とあるべきところ。猶、「訝」（『詩紀』）も可能な本文ではある。

押衙門下寒吹角　押衙門の下　寒に吹く角
開法寺中暁驚鐘　開法寺の中　暁に警む鐘　（210「客舎冬夜」）

この七言律詩の頷聯の一処「驚」（平声）のみ平仄式に合わない。仄声字が求められるところで、「平陵通二曙響一、長楽警二宵声一」（李嶠「鐘」）の類とみて、「警」（仄声。来歴志本・『詩紀』等）が良かろう。

諸児強勧三分酒　諸児強ひて勧む　三分の酒
謝日忘憂莫此過　謝して曰はく　憂へを忘るるに此れに過ぎたるはなからんと　（216「正月二十日有レ感〈禁中内宴之日也〉」）

讃岐の客舎で初めて迎えた正月、宮中内宴の日に、都遠く隔てた鄙に在る身を悲しむ七言律詩。同居している子供達が慰めようと思ってか、少しでも酒を飲んで欲しくて強いて父に勧め

る。そこで彼も「ありがとうね」の心持ちで、愁いを忘れるにはやはりこれ（酒）が一番だね、と笑顔を見せる……というように稿者は微笑しい親子のコミュニケーションを感知したいと思うのだが、諸本いずれも「謝日」としていて、「日を送り過ごす」（川口氏頭注）と解されている。どうも馴染めない。

号令今如此　号令今此の如くんば
応知**養長**仁　応に知るべし**長**く仁を**養**はんことを

（242「賦得二春之徳風一（題中取レ韻四十字成レ韻）」）

五言律詩の末句の平仄はこのままだと○○●○◎で、四字目の「長」のみ難があることになる。ここは恐らく本来「応知長養仁」とあったはずである。

豈図此歳無**豪**雨　豈に図らんや　此の年**膏**雨無からんとは
何罪当州且旱天　何の罪あってか　当州且に旱天なる
……（中略）……
善根道断呼甘**樹**　善根道ふこと断えたるも　甘**澍**を呼ばん
真実謀窮稔福田　真実　謀窮まるも　福田を稔らしめん

（262「丙午之歳…今茲自レ春不レ雨入レ夏無レ雲……」）

旱天に苦しむ讃岐の地を詠じた七言四十八句の長篇詩の一節。初めの句を「思いもしなかった、この年豪雨がないなんて」と訳して違和感を覚えるのは稿者だけではなかろう。どしゃ降りでは作物に害が及びかねない。ここは恵みの雨の「膏雨」（元禄版本・『詩紀』）でありたいところである。また、「甘樹」も同様に「甘澍」（草木を潤す雨）でなければならないはずだ。この二語は共に旱天祈雨の詩文には常套の語彙でもある。

茗葉香湯**免**飲酒　茗葉の香湯は　飲酒に**充**て
蓮華妙法換吟詩　蓮華の妙法は　吟詩に換ふ

（298「八月十五夜思レ旧有レ感」）

七言律詩の頷聯で、「免飲酒」が三連の仄声字となっている。「免」は平声でありたいところで、「充」（来歴志本）がふさわしく、意味も通り、「換」の対語としても良い。

此時天縦**金**毫詠　此の時に天は縦す　毫を**含**みて詠うことを
何処人遑秉燭遊　何れの処にか人は遑として　燭を秉りて遊ばん

（354「雨晴対レ月。韻用二流字一。応製」）

七言二十句の十五、六句で、「秉燭遊」と対句のはずであるから、「金」は「含」（来歴志本）が正しい。雨が晴れて夜月に対って詩興を起こし、月が明るく照らすので、人は慌しく燈火

を手に遊ぶこともないということを言いたいのであろう。

感興応無限　感興　応に限り無かるべし
窓頭力意看　窓頭　意を加へて看ん　（401「風中琴」）

五律の末句を「窓の頭に力と意と看れり」（川口訓読）と訓むのに稿者が抵抗を覚えたのは「力」に問題があるからではないかと思う。例えば、「蟬鬢加レ意梳、蛾眉用レ心掃」（『白氏文集』巻一二・0597「婦人苦」）などと見えるように、よく注意して、という程の意の表現「加意」の「加」の「口」部分を脱して書承されてしまったものではないかと思われてならない。

以上、くだくだと書き綴ってきたが、68 216 242 401詩以外は『文草』諸本（写本や版本と『日本詩紀』等）を披見すれば見出される異同である。江戸期の書写者により校訂されたものも恐らくは少なくないと思われるが、本文としての蓋然性は高いように稿者は考える。既に気付かれた方も多いと思うが、殆どは後世の誤写によって生じた異同であろうと考えられる。少し筆写が崩れて生じたもの ――「遇と過」「気と氛」の混同も少なくない ―― で、人の手を経る限り逃れられないものであろう。これ迄挙げた例はほんの一端に過ぎず、疑念の残る本文は本書中に多く存在するようだ。以下に更に詩一首全体を採挙げ、本文・解釈もからめ言及してみたい。

二

18　会三安秀才餞二舎兄防州一〈探得二隅字一〉

兄友弟恭不道無　兄友にして弟恭なれば　道無きにあらず
勤王自与恆親疎　王に勤み　自ら与り　親疎を恤ぶ
一廻告別腸千断　一廻別れを告ぐれば　腸千に断えんとす
我助君情独向隅　我は君が情の独り隅に向かふを助く

秀才安倍興行[2]が舎兄宗行の周防守任官[3]に際し、その餞宴を行ったが、道真も参会していたという七絶である。

第一句には、安倍氏（殊に兄宗行と弟興行）の兄弟関係を端的に詠み、兄が友愛を示し、弟が恭敬の心を持っていると説く。『顔氏家訓』（治家篇）に「父不レ慈則子不レ孝、兄不レ友則弟不レ恭[4]」（父に慈愛がなければ子は孝とならず、兄に友愛の心がなければ弟は恭敬の心は持ちえない）とあるあたりも想起されるが「不道無」は二重否定を用い、兄弟の道義が備わっていることを強調していることになる。

稿者が問題にしたいのは実は第二句である。「勤王」は王事

に勤(いそし)むこと、役人としての勤めを果たす意。「痛二百寮之勤一、王一、咸畢レ力以致レ死」（潘岳「西征賦」『文選』巻一〇）の李善注には「左氏伝狐偃曰、求二諸侯一、莫レ如レ勤レ王」と出典を記し、李周翰注には「百官勤二王事一尽レ命死」と意を示す。白詩にも「洞庭貢レ橘揀宜レ精、太守勤レ王請自行」（『白氏文集』巻五四・2441「揀二貢橘一書レ情」）「司徒令公分二守東洛一、移二鎮北都一、一心勤レ王、三月成レ政」（同上巻六七・3333詩題）などと用いられている。「自与」は、漢高祖（劉邦）の言葉に「吾聞、李斯相二秦始皇一、有レ善帰レ王、有レ悪自与」（『史記』巻五三・蕭相国世家）、また、管仲が鮑叔との仲を語った言葉にも「吾始困時、嘗与二鮑叔一賈、分二財利一多自与。鮑叔不二以レ我為一レ貪、知二我貧一也」（同上巻六二・管晏列伝）とあるものなどがよく知られる例であろうか。いずれも自分のものとして引き受ける。自らのものとする、という意味である。詩の上四字は、つまり、公の職責を自らのものとするということで、舎兄が周防守に任官したことを指す。問題は「恆」（恒）の字である。川口訓読のように「つねに」と訓(よ)むと平声となり、所謂近体詩の平仄式から外れる。ここは仄声でありたい所なのだ。道真詩は古詩でない限り平仄は実によく守られていると稿者は考えているのだが、この一箇処の瑕疵は不審でならない。その問題を詰める前に、下の「親疎」について考えてみたい。一般に親しいことと縁遠いこと（またその人達）、血縁と他人、というような意味で訳されがちである。だが、

九族親疎、長幼有レ序。（『漢書』五行志）

一村唯両姓。世々為二婚姻一。親疎居有レ族。少長游有レ群。（『白氏文集』巻一〇・0447「朱陳村」）

江魚群従称二妻妾一。塞雁聯行号二弟兄一。但恐世間真眷属。親疎亦足強為レ名。（同右巻七一・3663「禽中十二章」其三）

などの用例に依ると、血縁者、身内という意に殆ど同意かと思われる（一族中には身近かな存在という人とそうでもないという人もいるだろうが、ここでの「疎」はさしたる意味を持たない字と思う）。彼らの父安仁には「子男八人」[5]あったというから、集まった人も少なくなかったであろうし、道真のような身内でない者も餞宴に加わっている。上四字の内容の主体は舎兄宗行であるので、この第二句では宴の出席者達に対する彼の心情を読みとるべきではないかと稿者は考える。私案だが（異同はないようである）、「恆」（恒）は「恤」（仄声。邺に同じ）の誤字ではないかと考える（少し崩すと字形は酷似する）。白詩

にも、

猶須下副二憂寄一。恤レ隠安中疲民上。（『白氏文集』巻八・0353「初下二漢江一舟中作寄二両省給舎一」）

既非レ慕二栄顕一。又不レ恤二飢寒一。（同右巻一〇・0485「雨夜有レ念」）

と見え、憐れむ、又憂う意で用いられており、

安二存耄邁飡非一レ肉。賑二恤孤惸餓曲一レ肱。（『菅家文集』巻三・219「行春詞」）

朝議之興、為レ公為レ国、内誡二緩怠之吏一、外恤二窮弊之民一也。（源為憲「請レ被下殊蒙二天恩一依二遠江国所レ済功并成業之労一拝中任美濃加賀等国守闕上状」『本朝文粋』巻六168）

等、本朝の詩文にもまま見出せる。第二句はつまり、公務に勤（いそし）んで自ら周防守の任に与（あずか）った舎兄が、任地に赴けばしばしの別れとなるので、餞宴に集った身内を気遣い、いとおしく思っているという意なのではあるまいか。

第三句は、餞宴に集う人々と舎兄が別れの言葉を掛け合う場面であろう。皆腸が千々に断たれるような切ない思いを抱くという意。「一廻」は「夜来風吹落、只得二一廻採一」（『白氏文集』巻一二・0600「隔浦蓮」）とあるように一度（ひとたび）の意か、もしくはひとめぐりという程の意ではあるまいか。

第四句の「独向隅」は、川口注に指摘される通り、潘岳「笙賦」（『文選』巻一八）に「衆満レ堂而飲レ酒、独向レ隅而掩レ涙」[6]とあるに依る。猶、白詩にも「何為向レ隅客、対レ此不レ開レ顔」（『白氏文集』巻二・0070「続古詩十首」其六）「憫黙向レ隅心、摧頽触レ籠翅」（同上巻一〇・0519「早秋晩望兼呈二韋侍御一」）などと、憂愁にくれる人の行為として詠まれ、道真は後にも「一封書到二自京師一、満[7]紙公私読向レ隅」（『菅家文草』巻四・261「読二家書一有レ所レ歎」）と用いている。ここでは川口注が指摘するように、興行が舎兄との別れにたえかねて、ひとり部屋の隅に寄り悲泣する、それを道真が見守り支えているイメージと理解されよう。

三

46　過二尾州滋司馬文亭一、感二舎弟四郎壁書

弾琴妙一、聊叙二所懐一、献以呈寄。

偶尋文閣共閑居　偶（たまたま）文閣を尋ぬるに　共に閑居す

左見弾琴右見書　左に弾琴を見　右には書を見たり

昨夜歓逢春晩尽　昨夜歓び逢ふ　春の晩く尽きなんとするとき
今朝苦念夏来初　今朝苦に念ふ　夏の来る初め
高看壁上雲栖鳳　高だかと看る壁の上には　雲に栖む鳳
快聴絃中水聳魚　快く聴く絃の中には　水に聳つ魚
一一商量相況得　一一商量して　相況ぶることを得たり
張為不弛蔡無如　張も絶ならずと為し　蔡も如くことなからんと

「尾州滋司馬」は川口注も指摘（写本や版本類に傍書あり）されるように尾張掾滋野良幹[8]のこと。父は老荘を好んで諸道の人にその訓説を授けたという美濃権守従五位上滋野安成[9]（八〇一―六八）で、彼もまた学問に関わる家の者であった（或は、道真も彼の老荘の講席に列なったことがあったかも知れない）。さればこそその邸宅を「文亭」「文閣」と道真は記すのではあるまいか。良幹が方略試の宣旨を受け、都良香の下に「僧尼戒律」「文武材用」の策問（『都氏文集』巻五）に応じたのは貞観十五年五月二十七日以後（『類聚符宣抄』巻九・方略試・問者。良幹は当時尾張掾）のことになる。本詩については排列から貞観十一年（八六九）の作とする川口説は妥当であろう。その春の尽日の訪問を経、夏と変った日に詠まれた七言律詩である。道真は当時文章得業生で二十五歳。良幹の生没年は未詳だが、恐らく道真よりは年長であろう。前年六月に父を亡くしているので、良幹一家は服喪中[11]であったかとも考えられる。六月の一周忌には少し間があるが、道真は彼の邸宅に立寄り、良幹の舎弟四郎（人名未詳）の「壁書」と「弾琴」の妙才に感じ入り、自らの思いを述べて寄せた作ということのようである。

首聯は、「たまたまお宅を尋ねましたら御兄弟揃って心静かにお過ごしでしたね。身近かに琴を置いて弾いたり、書物を手にしておいでした」という程の意。第二句には川口補注の通り「左レ琴右レ書、楽亦在二其中一矣」（『列女伝』巻二・賢明「楚於陵妻」）が想い合わされよう。

頷聯は、「昨夜の春尽きる日に私を歓迎してお会い下さり、今日こうして夏を迎えた日に心にかけて与に懇ろに思いをめぐらしたことでしたね」の意。三月晦から四月一日にかけて一夜明かし語り合ったのかも知れない。話の子細はわからないが、ただ良幹の舎弟の書と琴の才に道真が感歎したことは題詞に明らかである。

頸聯ではその素晴らしさを表現する内容となり、「高だかと

見上げれば壁面には御舎弟の記した書、まるで雲に棲む鳳かと思える見事さ。また、心地よく耳を傾ける御舎弟の弾琴、その絃の響きにきっと水中の魚も身をそばだてるかと思われるような素晴らしさ」と言う。第五句、書の素晴らしさ、運筆のすぐれた様は、

鳳挙崩雲絶。鸞遊霧疎。（岑文本「奉レ述二飛白書勢一詩」『初学記』巻二一・文字）

鸞翔鳳翥衆仙下。珊瑚碧樹交二枝柯一。（韓愈「石鼓歌」）

私謂二朝官一曰、（許）圉師見二古迹一多矣。魏晋以後、惟茲二王。然逸少少レ力而妍、子敬妍而少レ力。今見二聖迹（高宗の書跡）一、兼二絶二王一、鳳翥鸞廻、実古今聖書。（『唐会要』巻三五・龍朔二年四月条）

などと詠まれるように、鳳の飛ぶ様に譬えられ、本朝でも早く嵯峨天皇のすぐれた書を称えて、

青山翠岳見二翔鳳一。花苑瓊竹望二走驎一。（「勅賜屏風書了即献表并詩」『性霊集』巻三）

更揮二玉管一、重写二金字一。鸞鳳翔二碧落一而含レ象、龍螭遊二蒼海一以孕レ義。張王擲レ筆、鍾蔡懐レ恥。（「奉二為桓武皇帝一講二太上御書金字法華一達嚫」同右巻六）

などと表現されていることも知られる。また、第六句は、例えば、

列子曰、瓠巴鼓琴而鳥舞魚躍。（『芸文類聚』巻四四・琴）

聴琴（瓠巴鼓琴、鱣魚出聴）。（『白氏六帖』巻二九・魚）

などとあるように、瓠巴の琴の演奏の素晴らしさに、水中の魚も感応するという故事を意識しており、「戯鶴聞応レ舞、游魚聴不レ沈」（江総「賦得二詠琴一詩」『初学記』巻一六・琴）もこれをふまえたものである。こうして、舎弟の書才と楽才が称えられ、尾聯に繋がってゆくわけだが、川口訓読は「一一商量すれば相況ぶることを得む　張り弛ばざることを為さば蔡も如くこと無けむ」とあり、解釈は頭注によると次のように記されている。

とっくりと考えてみると、壁書の芸も弾琴の技も、（無用に似て大いに有用であること）一一譬えてみることができそうだ。人民百姓も百日の労のあと、一日の楽しい祭によって永の苦労も解放されるようなもので、弓を張りっぱなしにして、弛めることを知らなければ、草莽の民百姓も更にましになるものでない。蔡は、草莽・草芥・くさむら。礼記、雑記下に、子貢が民の蜡という祭をみたとき、礼子

が「張りて弛ばざれば、文武も能はざるなり、弛びて張らざれば、文武も為さざるなり、一張一弛、文武の道なり」といったとある。

実は稿者はこの解がこれ迄の詩句の内容をどう受けて何を言おうとしているのか、皆目見当がつかなかったのだ。それが本詩を採挙げた理由でもある。第七句の意を稿者は「ひとつひとつ念入りにおしはかり比べることができました」とする。「一一」は一つ一つ（ここでは書と琴について）各々念を入れて、の含意であろう。「五絃弾、五絃弾。聴者傾レ耳心寥々。趙璧知二君入レ骨愛一。五絃一一為レ君調」（『白氏文集』巻三・0141「五絃弾」）はその一例。「商量」は見積もり評価する、くらべおしはかる意。[12] つまり、舎弟の書と琴の才を比況（くらべること）することができた、とここは解すべきところなのではあるまいか。そして、第八句では、何に比べたのか記さなければ、詩としての体を成さないのではないかと思う。諸本の異同をみると、「弛」を「敢」に作るものもあるが稿者は採らない。按ずるに、「弛」は恐らく「絶」の誤写ではなかろうか。異体字関係も念頭に置きつつ、「弛ー弩ー絶ー絶」の崩し字の近似性も想い合わさずにはおれない。その結果として稿者が提案する第八句は「張も絶ならずと為し　蔡も如くこと無からん」となる。「張」はここでは「後漢、張芝字伯英。善二草書一絶妙。時人語曰、臨レ池学レ書、池水尽黒。韋誕曰、伯英草聖、家中衣レ絹、先書後練也」（『付音増広古注蒙求』伯英草聖）の故事で知られる張芝を指し、舎弟の書をみると、あの張芝の書も絶妙（かけはなれてすぐれている）とはできないだろう、の意ではあるまいか。また、「蔡」は舎弟の琴の才を念頭に置いた表現で、漢の蔡邕やその娘蔡琰あたりを想起させずにはおかない（『芸文類聚』巻四四・琴。所引の『蔡琰別伝』『搜神記』や蔡邕「琴賦」など参照）。本朝でも、「邕郎死後罷二琴声一」（『新撰万葉集』巻上『新撰朗詠集』巻上・蝉178）「蔡女弾レ琴清曲響」（嵯峨天皇「和下左衛督朝嘉通秋夜寓二直周廬一聴二早雁一之作上」『凌雲集』）などと彼らの故事は詠込まれてよく知られたものである。即ち、下三字の意は、舎弟の弾琴の素晴らしさときたら、あの蔡氏だって及ばないだろう、の意になる。道真は良幹の舎弟の書と琴の才に感じ、各々張芝や蔡邕（又は蔡琰）を引き合いにして称賛したというのが稿者の結論である。

四

366　御製題二梅花一賜二臣等一。句中有下今年梅花減二去年一之歎上。謹上二長句一、具述二所由一。

不是天寒地不宜　是れ　天の寒くして地の宜しからざるにはあらず
此花憔悴計応知　此の花の憔悴　計らひて応に知るべし
粉顔暗被粧楼借　粉顔　暗に粧楼に借られたるか
香気多教浴殿移　香気　多く浴殿に移さしむるか
開未人看蜂且採　開くも　未だ人の看ざるに　蜂且がつ採るか
落非時至笛先吹　落つるは　時の至るに非ざるに　笛先づ吹くか
誰人攀折栄華取　誰人か攀折して　栄華を取れる
新拝相公**揷**四支　新たに相公を拝し　四支に**捶**たん

寛平五年（八九三）二月十六日、道真は参議に昇進した。それから程ない頃であろう、宇多天皇自らお作りになった「題二梅花一」詩が、道真ら近臣に下賜されたようだ。その御製中に「今年の梅花（の花開いた数）は去年より減少した」とお歎きになっている句があったので、道真は謹しんで、ことこまかにその理由を申し上げるべくこの七律を成したことが題詞から知られよう。「今年梅花減去年」が宇多の詩句をそのまま摘句したものか、詩句の内容を掻摘まんで記したものか定かではない（引用句であるなら平仄式上は「今年」は「今歳」であるのが望ましい）が、ともあれ、この詩はとても興味深い作なので、稿者の視点から解釈を試みてみたい。

首聯は天皇の歎きの内容を受けて綴られる。

今年の梅花が去年より少ないのは、天下が寒く、この地が宜しきをえていないというわけではないのです。今年の梅花の衰えについては、あれこれ考えてみればわかりましょう。

という意味であろう。「不是～～」（これは～〈だから〉ではない）の語法は、

不二是花中偏愛一レ菊。此花開後更無レ花。
（元稹「菊花」『千載佳句』巻下・菊656）

『和漢朗詠集』巻上・菊267）

不二是禅房無二熱到一。但能心静即身涼。
（白居易「苦レ熱題二恒寂師禅室一」『千載佳句』

巻上・避暑133『和漢朗詠集』巻上・納涼161）

などの詩句でもよく知られる。「天寒」（天候の寒々とした様）はありふれた語彙で、「心憂二炭賤一願二天寒一」（『白氏文集』巻四・0156「売炭翁」）他白詩にもよく見える。「地宜」（その土地にかなって良いこと、地のよろしきをえていること）も、

疏鑿出二人意一。結構得二地宜一。（『白氏文集』巻六二・2987「裴侍中晋公以二集賢林亭即事詩二十六韻一見レ贈……」）

催二課百姓一、一赴二産業一、必使レ不レ失二地宜一、人阜家贍。（『続日本紀』天平九年九月二十二日条詔）

などと見え、特に珍しい語彙でもない。「憔悴」はここでは梅樹の窶（やつ）れ衰えた意（枯れる意にも用いられることもある）で、

移レ根易レ地莫二憔悴一。野外庭前一種春。（『白氏文集』巻一三・0638「戯題二新栽薔薇一」）

躊昔栄華都不レ見。今時憔悴一応レ嗟。（丹治比清貞「和下菅祭酒賦二朱雀衰柳一作上」『凌雲集』）

などは植物の衰えに用いられている類例である。

さて、頷・頸聯は、「計応知」（あれこれ考え思いめぐらして知る、わきまえ理解する）という表現を受けて、今年の梅花の減じた理由をあれこれ忖度詮索する展開となるはずなのである。従って稿者の訳は次の通りとなる。

その美しい梅花が、人知れず妓女達にその粧いを貸し与えたためではないでしょうか。

（また）そのかぐわしい香りを浴堂殿に移させたためではないでしょうか。

（あるいは）花開いたものの、まだ人が見もしないうちに、蜂達が花を摘んでしまったのではないでしょうか。

（それとも）花が散り落ちたのは、その時期が来たからではなく、笛で先に「梅花落」の曲を吹いてしまったためではないでしょうか。

道真があれこれとユーモアを交えて臆測してみせていると考えるのである。「粉顔」は「単枕夢啼粉顔穿」（小野岑守「奉レ和二聖製春女怨一」『凌雲集』）とあるように本来女性の美しい化粧顔を言うが、ここは道真が早くに、梅花の咲く様を「偸二得誰家香剤麝一。送二将何処粉楼瓊一」（『菅家文草』巻一・67「早春陪二右丞相東斎一同賦二東風粧レ梅一」）と表現していたのを想起すべきか。後の「舞妓含レ粧謝二粉顔一」（源英明「秋菊有二佳色一」『類聚句題抄』324）も花と女性の化粧した顔を重ねて詠む一例。「粧楼」は妓楼や（宮中の）美女の化粧部屋を指し、

道真は後にも「粧楼未レ下詔来添」（『菅家文草』巻五・365「催粧」『和漢朗詠集』巻下・妓女711）と詠み、白詩にも「低花樹映小粧楼」（『白氏文集』巻五五・2597「春詞」）と見えている。「香気」は（梅花の）かおりで、「映レ日花光動。迎レ風香気来」（陳後主「梅花落」）「可レ憐香気歇」（江総「梅花落」）などと詠まれ、『楽府詩集』（巻二四・横吹曲辞四）に「梅花落、本笛中曲也」と記され、「逐レ吹梅花落。含レ春柳色驚」（李嶠「笛」）などとも詠まれて、第六句のような表現に繋がることになる。「浴殿」は「浴殿西頭鐘漏深」（『白氏文集』巻一四・0724「八月十五夜禁中独直対レ月憶二元九一」『新撰朗詠集』巻下・禁中479）とあり、大明宮中の浴堂殿のこと。「浴堂」に同じだが・ここは仄声字が求められるので「浴殿」としている。白詩には他に「慣レ看二温室樹一、欲レ識二浴堂花一」（同上巻五六・2654「和二春深二十首」其七）「遥想六宮奉二至尊一。宣徽雪夜浴堂春」（同上巻四・0161「陵園妾」）とも詠まれており、道真の句もそれらの表現と関わるはずである。また、「蜂」は勿論「蜜熟蜂声楽」（同上巻五一・2218「和二微之四月一日作一」）とあるように花の蜜を求めるものだが、「銜レ花空自飛」（梁簡文帝「詠レ蜂詩」『芸文類聚』巻九七・蜂）とも表現されているので、第五句のように詠まれることに結びつくことになる。

さて、尾聯であるが、その意を次のように稿者は考える。

（梅花が去年より減ったと帝は詠まれましたが）誰が一体梅花の盛んに咲いた枝を手折ってしまったのでしょうか（と言えば、それはきっと私道真でございます）。

（この春こうして栄（は）えある）参議を拝命致しましたからには、わが四肢に捶（むちう）ちお仕え申し上げようと思うのでございます。

末句には「臣不レ次為二宰相一。故上二此意一喩レ之」の自注が記されるように、彼自身の決意が述べられる内容にならなければ詩として意味をなさないはずで、「新しく参議（唐名は相公）に任命せられて、手足の工合が離ればなれのようになって、勝手がきかない」（大系本頭注。傍点は稿者）状態をここで申し上げることなどありえないと考える。

この詩は、帝の歎きに対し、梅花の減った理由をあれこれ述べたて、結局は参議に昇進した自分自身が栄華（梅花が盛んに咲いていることに掛ける）を手にしたせいなのだと言い立て、この上は全身全霊をもって帝にお仕えし報いたいという機智に富んだ叙述法を用いたものだと考えるべきである。「捶」は明

らかに「捶」の誤写と言わねばなるまい。

五

結びにもう一首機智的な梅花詠を採挙げてみたい。前詩の梅花が減った事を詠むのとは逆の内容である。

452　賦二殿前梅花一。応二太上皇製一。

笑松嘲竹独寒身　松を笑ひ　竹を嘲る　独り寒き身(13)

看是梅花絶不隣　看れば是れ　梅花絶えて隣りせず

何事繁華今日**陪**　何事(なん)ぞ繁華　今日は**倍**せる

一朝応**過**二天春　一朝　応に二天の春に**遇**へばなるべし

〈于レ時、天子朝二覲太上皇一。故云〉

本詩は「天皇朝二覲太上皇於朱雀院一。以レ入二新年一也。賦二庭中梅花一之詩」（『日本紀略』昌泰二年正月三日条）とあるにほぼ合致し、醍醐天皇が朱雀院の宇多上皇に新年の挨拶にお出ましになった時の作ということになる。詩題に「殿前」「庭中」の異同はあるものの（恐らく『文草』の方が正しかろう）さして内容に大きく関わることはあるまい。稿者が本文上問題があると思うのは「陪」と「過」であり、ここは「倍」（来歴志本・元禄版本・『日本詩紀』等）と「遇」でありたいところである。後半二句の川口注は各々左の通りである。

今朝、朝覲行幸に際会して、その晴れの御儀に参加できる庭前の梅の花の光栄は、まことに言語に絶している。

天子が太上皇に朝覲されるという、いわば一日で二代の天子をいただく大御代の春を過ごすこととなるであろう。

これに対する私解では、一首は次のような意と考える。

松を笑い竹を嘲笑するのは、ぽつんと寒々とした中に咲いている身（の梅花）である。

殿前を伺い見れば、梅花は美しく咲き、それに並ぶようなものは他に全くない。

一体どうして、その咲き誇る梅花が、今日はいつもに倍する程なのか。

それは、ひとたび（朝覲行幸がございまして）二人の天子様（天皇と上皇）がこうしてお会いになった春だからでございましょう。

即ち、天皇と上皇の和がいつもに倍する梅の開花をもたらしたと言祝(ことほ)ぐ趣意と考えるべきなのではないかと稿者は考える。第三句は問いかけで、第四句がそれに答える内容となってまとまりを持つことになる。

如上のようなわけで、稿者はこのところ道真詩の機智的な表現に殊の外注目したい思いに駆られる。（この詩については彼が当時意を得た状況下にあったことも関係あるかと思われるが）フォーマルな「詩臣」の詠みぶりを越えて、結構遊び心に富んだ作も少なくなく、『文草』の世界の多様性が道真詩の魅力なのではないかと考えを廻らせているところなのである。

〔注〕

（1）「『菅家文草』をめぐって」（同志社女子大学『日本語日本文学』13号、平成十三年六月）「菅原道真の漢詩解釈臆説」（『中央大学国文』50号、平成十九年三月）。

（2）彼とその周辺のことについては、滝川幸司「安倍興行考」（『菅原道真論』塙書房、二〇一四年）に詳しい。猶、以下拙稿で採挙げる第二句を、川口久雄氏は「王に勤（つつし）むことは自（おのづか）らに恒（つね）に親しきひとと疎（おろか）なるなり」と訓み、「この一句意味未詳。あるいは王事をつつしみはげまんがためには肉親のもとをも離れることも当然のことだの意か。恒・親・疎の三字、韻字に強いられた語法だと思うが、解しがたい」と頭注に記す（大系本120頁）。

（3）『三代実録』によると従五位下勘解由次官の宗行が周防守に任じられたのは貞観七年（八六五）正月二十七日のことで、同三月十九日には鋳銭長官（周防守の兼任職）を兼ねている。その年、道真は二十一歳。猶、川口久雄氏は当該詩を翌貞観八年の作とする。

（4）もともとは『尚書』（康誥）に「封、元悪大憝、矧惟不孝不友。子弗二祗服一厥父事一、大傷二厥考心一、于レ父不レ能レ字二厥子一乃疾二厥子一。于レ弟弗レ念二天顕一、乃弗レ克レ恭二厥兄一。兄亦不レ念二鞠レ子哀一、大不レ友二于弟一」（封よ、最大の悪で憎むべきものとは不孝と不友だ。子が父に従わず、父の心を傷つけたりすれば、父も子を愛し育てることはできず、その子を憎むことになりかねない。また、弟が天の定めた兄を敬（うやま）うことなく、恭順の心を持てなければ、兄も弟をかわいく思うことなく、友愛の気持ちを持つことはなかろう）とあるに依るだろうか。「不レ友（書云、兄不レ友、弟不レ恭）」（『白氏六帖』巻六・兄弟）とも見えている。

（5）『三代実録』（貞観元年四月二十三日条）の安倍安仁薨伝参照。そのうち、貞行・宗行・清行・興行らは殊に知名度が高かったようである。

（6）猶、その李善注には「説苑曰。古人於二天下一、譬一堂之上、今有二満一堂飲一レ酒、有二一人一、独索然、向レ隅泣則一堂之人皆不レ楽也」とあり、呂延済注には「雖二衆満レ堂而楽一、独向二一隅一掩レ涙而已。隅、角也」と見える。

（7）大系本他多く「借紙」に作るも、内閣文庫蔵来歴志本に依り「満紙」に改めた。紙面一杯にの意。

（8）良幹について言及するものに、滝川幸司「菅野惟肖考」（注1所引と同書所収）があるので参照されたい。

（9）『日本紀略』（貞観十年六月十一日条）に「美濃権守従五位上滋野朝臣安城（『三代実録』『類聚国史』の表記は滋野安成）卒。安城尤好二老荘一。諸道人等受二其訓説一。卒時年六十八。良幹父也」とある。小野篁（八〇二―五二）とほぼ同世代で、是善（八一二―八〇）より十歳以上年長になる。

（10）「起レ家献レ冊之輩、多是歴二方略試一、聖代不易之軌範也。貞観菅野惟肖・滋野良幹、寛平参議菅根朝臣・矢田部名実・三統理平……」（『朝野群載』巻一三・紀伝上「請レ准二拠旧例一被レ下二宣旨一以二正六位上行因幡大掾大江朝臣通国一令レ奉二方略試一状」）とあるので、貞観年間に菅野惟肖と共に紀伝道における起家として注目されていた人物。

（11）「喪葬令」（17）に「凡服紀者、為二君・父母・及夫・本主一一年」とある。

（12）張相著『詩詞曲語辞匯釈』（巻五・「商略・商量」）、塩見邦彦著『唐詩口語の研究』（中国書店、一九九五年）に言及されている。

（13）あるもの（梅花）のすばらしさを訴える為に、本来嘉賞に値するもの（松と竹）を貶めて表現する手法は漢詩文にはよく見えるもので、ここでは松・竹・梅を擬人化していることも知られよう。猶、以下は稿者の全くの臆測になるが、読み手によっては次のように解する者もあるかも知れない。即ち、道真は、朝覲行幸に際会し、（己の栄達に矜恃を抱いていたこともあり）自身をここで梅花に仮託し、彼を快く思っていない人達を松・竹に暗に重ねているのだと。だが、そうした見方は稿者には聊か興ざめに感じられてならないのである。